

第1節 カリキュラム・マネジメントと体制整備の必要性

1. 学習活動を支えるカリキュラム・マネジメントと校長のリーダーシップ

質の高い豊かな学習活動を推進し、生徒の課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力等を高めるためには、各学校で総合的な学習の時間のカリキュラムを適切に編成し、マネジメント（経営管理）しなければならない。

カリキュラム・マネジメントは、以下のようなサイクルで行われる。

- ① 地域や学校、生徒の実態等の現状を把握する。
- ② 求める生徒の姿等を目標として設定する。
- ③ 目標と現状のギャップを分析し、目標の達成を促す要因や阻害する要因を考察する。
- ④ 目標の達成度を測る具体性のある評価指標を決める。
- ⑤ 適切なカリキュラムを編成し、それを支える体制を整備する。
- ⑥ 指導計画に沿って実践する。
- ⑦ 成果・効果を評価・省察してカリキュラムを改善する。（※p.52の図を参照）

そして、その土台となるのが、校長のリーダーシップである。校長のリーダーシップの下、全教職員が学級、学年の枠を越えた、研究実践や意見交換等を実施しながら、適切な指導計画を作成することが重要となる。また、指導計画を作成する際も、実施する際も学校の外部との連携が必要となり、ここにも校長のリーダーシップが必要となる。

2. 体制整備の4つの視点

カリキュラムを動態化させ、指導計画を確実に実施していくためには、校内の体制づくりも欠かせない。各学校が、適切な指導計画に基づき、生徒一人一人にとって、充実した総合的な学習の時間を実現するためには、以下に記した4つの視点を取り入れた体制整備が重要となる。

校内体制整備のための4つの視点

校内組織の整備

- **生徒に対する指導体制**
 - ・生徒の学習集団に応じた指導体制の工夫
- **実践を支える運営体制**
 - ・学習を円滑に推進する教員の職務・役割の適切な分担と「校内推進委員会」の充実
 - ・運営の中心となる「総合的な学習の時間コーディネーター」と授業担当者による会議
- **校内研修等の充実**
 - ・定期的な研修の設定、効果的な研修の工夫

授業時数の確保と弾力的な運用

- **年間授業時数の確保**
 - ・単位の履修と修得に必要な授業時数の確保
 - ・体験活動を適切に位置付けた、確実かつ柔軟な実施
- **目的に応じた単位時間等の弾力化**
 - ・生徒の実態、指導内容のまとめり、学習活動等を考慮して、効果的な単位時間・時間割を設定
- **1年間を見通した授業時数の運用**
 - ・各学校の創意工夫による年間指導計画等の編成
 - ・活動の特質に応じ夏季等の長期休業日の効果的な活用

学習環境の整備

- **学習空間の確保**
 - ・体験活動を行う様々な場所、探究的・協同的な学習活動に対応した空間の確保
- **学校図書館の整備**
 - ・学校図書館の学習・情報センターとしての機能の充実
- **情報環境の整備**
 - ・ICT環境の充実と教員のICT活用指導力の向上

外部との連携の構築

- **地域の教育資源の積極的活用**
 - ・日常的な連携による協力的システムの構築
 - ・地域連携を推進する組織の設定と教師の配置
 - ・地域資源リストの充実と活用
- **総合的な学習の時間の成果の伝達**
 - ・成果発表の場と機会の設定
 - ・学校と家庭・地域との信頼関係の構築
- **活性化に向けた生徒の地域貢献**
 - ・生徒が提案等する体験の重視

校長のリーダーシップの下に進める校内組織の整備・活性化

機動的・効率的な校内組織の構築

協同的な教職員の関係の醸成

家庭・地域・関係機関との関係づくり

活動の様子・成果の外部への情報発信



特色ある教育課程の編成

教師の指導力等の向上

他の学校園や企業等との連携

教育委員会との予算折衝

総合的な学習の時間にかかわるビジョンと実現に向けた手立ての明確化

第2節 組織整備の実践事例

各学校では、総合的な学習の時間の目標を達成できるように、校長のリーダーシップの下、全教職員が協力して全体計画及び年間指導計画、単元計画などを作成し、互いの専門性や特性を發揮し合って実践していく校内推進体制を整える必要がある。

また、探究的な学習においては、教師が自分の知っている知識・技能を伝授することに終始するのではなく、学習主体の生徒同士が協同して合意を形成し、課題を解決するために、教師はコーディネーター

ネット（調整）・ファシリテート（促進・援助）をするという指導観を共有して指導に当たることが効果的である。

この節では、生徒に対する指導体制や実践を支える運営体制と教師のカリキュラム開発能力等をも高めるための研究推進体制の主に2つの側面から、校内推進体制の実践事例を紹介する。

1. 指導体制と運営体制の整備

(1) 生徒に対する指導体制

総合的な学習の時間の授業は、各学校で定められた目標や内容により、学級担任が自学級を直接指導するばかりではなく、学級枠を取り外して学習集団を組織し学年内の教師が指導を分担する指導体制や、学年枠も外して学習集団を構成し教職員全体で指導を分担する指導体制などにより学習活動が行われることがよく見られる。ここでは、それらの実践事例を紹介する。

事例① 学年教師が学級ごとの学習集団を分担して指導した例

《A高校の概要》

・生徒数 720 人 ・学級規模 各学年 6 学級 ・教職員数 46 人 ・学区の特色 都市部住宅地

A校は大都市にある1学年6学級の中規模校です。A校は2014年に「国連持続可能な開発のための教育の10年」の締めくくりの会合が同市で開催されることから、第2学年において「共生と平和のためにしなければならないこと」について単元を組み、学級を単位とした学習集団により学習活動を行いました。指導は、学年教師が担当し、青年海外協力隊や大学教員、NPOの人材を活用して推進しました。

生徒の学習活動	学年教師の指導にかかわる動き
①単元についての学年全体ガイダンス（体育館） ● 単元のねらい、学習課題例、学習活動例、スケジュール等 ● 「共生と平和」について青年海外協力隊員の報告を聴く。	学年会議 1 ● 「総合的な学習の時間コーディネーター」と学年ごとの総合的な学習の時間担当、担任・副担任との協同的な指導体制を築き、単元のねらい、指導計画等の協議と共通理解、それぞれの分担等を決定する。
②学級ごとの学習課題（テーマ）の設定のための活動（図書室とPC室） ● 図書室やPC室で課題の選択のための調査	課題意識をもたせる意図的な働きかけ ● 各学級で情報収集の時間を別々に設定し、担任と副担任が図書室とPC室とで分担して指導に当たり、必要な情報の収集を助ける。
③調べて分かったことを中間報告（各学級） ● ワークシートに記入したことをグループごとに発表。	課題決定に向けた指導（学級担任） ● 各学級で協同的に課題設定を行い、グループごとに課題を発表させて学級全体で取り組む学習課題（テーマ）をまとめる。
④学習課題（テーマ）を決める（体育館） ● 各学級から「子どもの人権」「ジェンダー」「南北問題」「国際協力・ボランティア」「多文化共生・異文化理解」「紛争解決」の6つの学習課題（テーマ）が出される。	学年会議 2（総合コーディネーター参加） ● 各学級の進捗状況を報告し、今後の計画等について確認する。
⑤各学級のグループごとに成果の発表（体育館） ● ポスターセッション形式で発表を行い、大学講師やNPOの人が講評・助言を行って優秀作を発表する。	各学級のグループごとの探究活動を支援 ● 探究的な活動、協同的に学ぶ活動になるように支援する。
⑥個の論文の作成（各学級） ● 個人で自分の設定した課題について論文を作成する。	発表会の運営 ● 進行、PC準備、記録等の分担をする。

事例② 学年教師が学級枠を外した学習講座を分担して指導した例

《B高校の概要》

・生徒数 960 人 ・学級規模 各学年 8 学級 ・教職員数 58 人 ・学区の特色 地方都市近郊

B校は地方都市を流れる川の河口付近にある1学年8学級の大規模校です。近くには干潟があり、カブトガニや絶滅危惧種のクロツラヘラサギなどが生息していますが、近年の都市化や環境の変化で個体数が減少しています。そこで、B校は第1学年（在籍者数320名）において、生物基礎や現代社会の授業で干潟環境や生物の多様性などについて学習した後、総合的な学習の時間を活用して現地調査を行い、行政や地域の人と連携して保全活動を行いました。

指導は学年教師が担当し、科学館の学芸員や日本野鳥の会の会員、行政担当者や、大学教員、地域の人などの人材を活用して推進しました。

その際、カブトガニ・クロツラヘラサギ・その他の希少種の生態系研究、河口や干潟の水質研究、地域の地誌研究、地域の気象研究、地域の廃棄物処理研究、地域の産業研究などの講座を開設し、希望によって選択させ、講座ごとに調査・研究と保全活動を行いました。その成果をプレゼンテーションとポスターセッションの2つの形式で発表させ、科学館の学芸員や日本野鳥の会の会員、大学教員などから講評・助言を受けました。

各講座の計画及び学習内容は、「総合的な学習の時間コーディネーター」と学年ごとの総合的な学習の時間担当が総合的な学習の時間の全体計画・各学年の年間指導計画を踏まえ作成した後、全教師により意見交換、調整が行われています。

第1学年における1年間の学習の流れ	
4月 ↓ 5月	<p>■学年での「基礎講座」における学習</p> <p>①全体ガイダンス（B高総合的な学習の時間についての説明、各講座内容の説明）</p> <p>②「研究概論（研究の進め方）講座」「情報収集活用講座」「調査・研究講座」での学習</p>
6月 ↓ 9月	<p>■学年での探究型学習</p> <p>地域に学び、地域をよりよくする探究的学習。</p> <p>①カブトガニ・クロツラヘラサギ・その他の希少種の生態系研究、河口や干潟の水質研究、地域の気象研究、地域の地誌研究、地域の廃棄物処理研究、地域の産業研究などの講座に分かれる。</p> <p>②講座ごとに現地調査を行って干潟等の保全活動に協力し、身近な環境への関心や環境問題に関わる態度を育成する。</p>
10月 ↓ 12月	<p>■有識者等からの講義を受け、保全活動のあり方を考察する（行政担当者、大学教員など）</p> <p>■年間研究成果報告会の準備と開催（保護者、関係者・地域住民に公開）大学教員などから講評・助言を受けた。</p>

事例③ 全教師が学年枠を外した学習講座を分担して指導した例

《C高校》

・生徒数 480 人 ・学級規模 各学年 4 学級 ・教職員数 40 人 ・学区の特色 中山間地域

C校は、教科指導において協同的な学習機会を効果的に位置付けるとともに、総合的な学習の

時間でも学年を超えた協同的な探究学習を推進しています。C校は、少子高齢化する地域にあって近隣の商店街に空き店舗が増える実態を踏まえ、総合的な学習の時間において「地域の課題を考える」ことにしました。第1学年から第3学年までの生徒が10の領域に分かれ、それぞれの大講座の中で探究したい学習課題（テーマ）を出し合い、類似のまとまりごとに縦割りで探究班を編成しました。10の領域は、国際関係、ICT、心理、福祉、芸術、歴史文化、健康・栄養、政治経済、教育、自然・環境のキーワードで区分されています。

学習活動は、最初は2・3年生がリーダーシップを発揮し、1年生がフォロワーに回るなど、協同的な形態で進められます。

それを支援する指導体制は、10の領域ごとに3～4名の指導教師が集まり、総合的な学習の時間の学年ごとの評価規準を作成し、指導教師がそれを生徒と共有して指導・評価するよう留意しています。

縦割り班における学習の流れ	
4月 当初	<p>■全教員による指導計画等の共通理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習の時間コーディネーター（以下コーディネーター）を中心に単元のねらい、内容、計画、指導体制等についての検討、共通理解を全教員によりで行う。
4月	<p>■全校生徒への説明会から縦割り班の編成</p> <ol style="list-style-type: none"> ①全体説明会でコーディネーター等から単元の学習内容、学年ごとのねらい等についての説明を行う。 ②国際関係、ICT、心理、福祉、芸術、歴史文化、健康・栄養、政治経済、教育、自然・環境10の領域に分かれ、それぞれの領域の中で探究したい学習課題（テーマ）を出し合い、類似のまとまりごとに縦割りで探究班を編成する。 ③第2・3学年の生徒を中心に学習課題等についての検討を行う。全教員が編成された班の担当となり支援、指導、助言を行う。
5月 ↓ 11月	<p>■縦割り班ごとの探究的な学習の推進</p>
12月	<p>■探究的学習報告会の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポスターセッション、プレゼンテーション
10月 ↓ 12月	<p>■有識者等からの講義を受け、保全活動のあり方を考察する（行政担当者、大学教員、NPOの人など）</p> <p>■年間研究成果報告会の準備と開催（保護者、関係者・地域住民に公開）大学教員、NPOの人などから講評・助言を受ける。</p>

(2) 実践を支える運営体制

学校の多くの学習活動は、一人一人の教員が個別に行うのではなく、推進組織が立ち上げられ互いに連携して進められている。特に総合的な学習の時間では、横断的・総合的な学習が展開されるため、教師の特性や教科・科目等の専門性を生かした全教職員の協同的な取組が求められる。そのため指導方法や指導内容について、気軽に相談できる仕組みを設けておくことが大切になる。

校長は自分の学校の実態に応じて既存の組織を生かしつつ、新たな発想で運営のための組織を整備し、生徒の学習活動を学校全体で支える仕組みを校内に整える必要がある。

事例① 小規模校の運営組織の例

● D校の教師の総合的な時間にかかわる分掌内容

教職員	校務分掌	総合的な学習の時間についての分掌内容
a教頭		運営体制の整備、校外の支援者・支援団体との渉外
b主幹教諭	教務主任 ICT担当	各種計画の作成と評価、時間割の調整、指導の分担と調整、情報機器等の整備及び配当。
c教諭	生徒指導主任、担任	学習活動時の安全確保、小・中学校との連携の推進
d教諭	1年主任、担任、総合担当	学年内の連絡・調整、研修、相談
e教諭	2年主任 研究主任	学年内の連絡・調整、研修、相談 研修計画の立案、校内研究の実施 ★総合的な学習の時間コーディネーター
f教諭	3年主任 担任	学年内の連絡・調整、研修、相談
g教諭	進路指導主任、 司書教諭 3年担任	職業や自己の将来に関する学習に関わること、大学等との連携の推進 必要な図書整備、生徒の図書館活用支援
h教諭	養護教諭 保健主任	学習活動時の健康に関わること、食育に関わること。
主任	事業費の 予算・決算	事業の効果的な実施に資する経費に関わること。

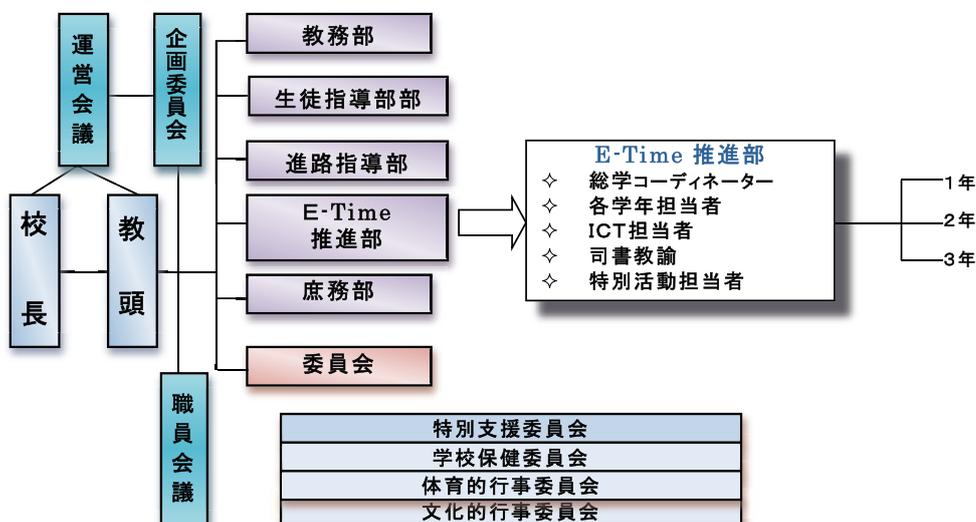
D校は、全校9学級の小規模校です。教職員数も少ないことから、教師が複数の校務分掌を担当しなければならない実態がありました。

総合的な学習の時間においても、複数の校務分掌を担当する1人の教師により全学年の指導計画の作成や外部講師との調整が行われていて、教師の協同性を高めることができませんでした。

本年、新校長が着任し、総合的な学習の時間については、既存の組織を生かして研究主任を総合的な学習の時間コーディネーターに任じ、そのフォロワーとして「総合担当」を設け、全教師が教科・科目等の専門性を発揮できる指導体制作りを進めるとともに、一人一人が計画、運営についても役割と責任をもつことになりました。

このことにより、総合的な学習の時間についても、教師同士が話し合う場面が増えるとともに、全教員が学年、学級の壁を越え、それぞれの専門性を生かし行われるようになりました。

事例② 大規模校の運営組織の例

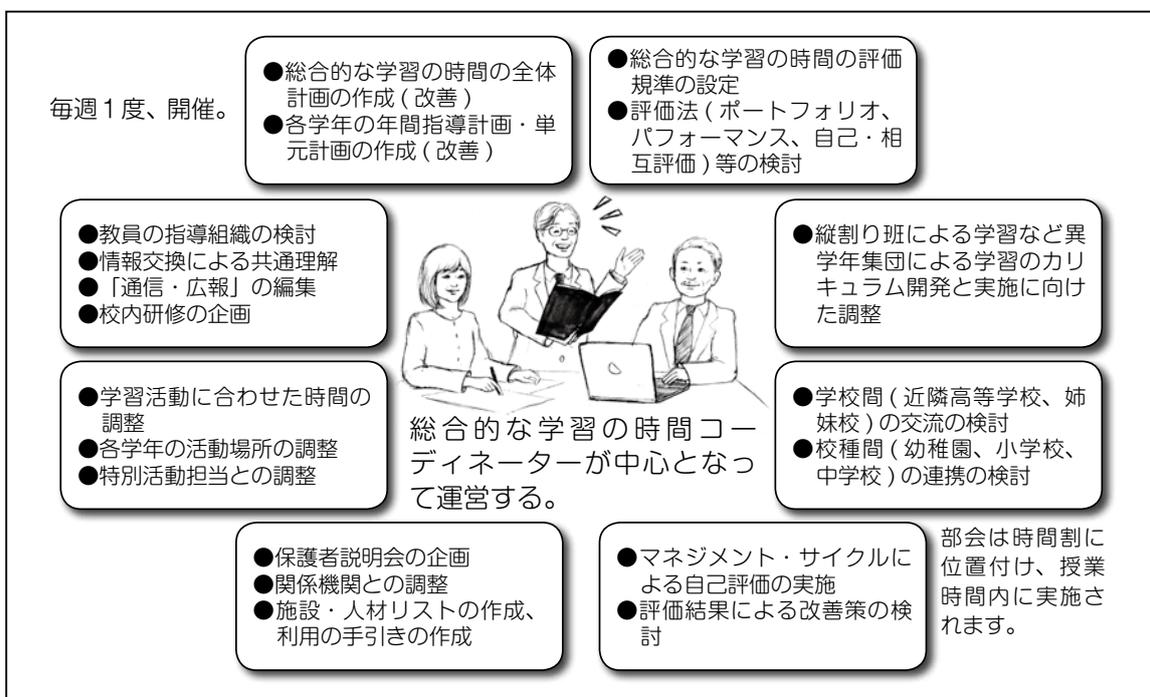


全校 21 学級の大規模校の E 校では、各学年により総合的な学習の時間の年間指導計画や単元指導計画が作られ学習活動が推進されていました。

このような実態ゆえに、全体計画との整合を意識しないで学習が行われたり、異学年（生徒・教員）と合同した学習等がほとんど計画されなかったりするなどの課題が見られました。

このような課題の解決のため、昨年度は総合的な学習の時間コーディネーターと各学年担当者等が 1 ヶ月に 1 度、情報交換・協議を行う「E-T i m e 推進委員会」という特設の委員会組織を立ち上げましたが、機動的に企画・立案したり、協同的な運営をしたりするまでには至らなかったため、本年度は「E-T i m e 推進部」を新設し、時間割の授業の空き時間をそろえて毎週 1 度の企画会議を行うように改善しました。

E 校の「E-T i m e 推進部」における主な業務内容



E 校の「総合的な学習の時間コーディネーター」の具体的な職務内容

<p>【指導計画等の作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●全体計画作成の中心となる ●学年の年間・単元指導計画作成を支援する 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域や地域人材の実態・特性を知るため地域巡りや地域の人との交流等を積極的に行った。 ・自校の教育課程・校長の経営方針を熟知するように努力をした。 ・生徒・教員・保護者等の思いや願いを理解するよう対話に努めた。 ・総合的な学習の時間についての理解を一層深めるために関連する研究会、研修会等に主体的に参加し自己啓発に努めた。
<p>【教職員の協同の促進と意欲の向上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●校内推進組織を運営する ●情報交換を活性化させる ●校内研究との関連を図る 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な情報交換会を企画・実施した。 ・学年を越えて協同して実施する学習を提案、実施した。 ・各学年の授業に参加し、その取組の良いところを随時、職員会議等で積極的に伝えた。また、「通信・広報」に記載し発行した。 ・若手教員の指導について直接指導助言を行った。（OJTの実施） ・校内研究等を先導した。また、先進事例等を集め随時報告した。
<p>【保護者、地域、他校、異校種との連携の推進】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●連絡会を開催する ●授業公開を実施する 	<ul style="list-style-type: none"> ・Web サイトを開設し、写真等による学習状況の報告や協力要請の呼びかけを掲示した。 ・教員が P T A ・地域行事、学校公開に出席するよう働きかけた。 ・近隣校の総合的な学習の時間の内容等を自校で定期的に報告した。 ・近隣中学校との共同校内研究会を開催した。近隣校の総合的な学習の時間に関わる校内研究会に参加した。
<p>【指導計画・内容等の評価と改善】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●活動の成果を検証した ●校内内外の評価を実施した 	<ul style="list-style-type: none"> ・全生徒のパフォーマンス評価、ポートフォリオ評価等を実施した。 ・国・自治体実施の学力調査・意識調査との関連を分析し、成果と課題を考察し全教員に紹介した。 ・生徒・保護者・地域人材対象の意識調査等を実施した。 ・年 2 回、指導計画等についての自己評価を実施し改善に結び付けた。

2. 校内研修等の充実

総合的な学習の時間を充実させ、その目標を達成する鍵を握るのは、指導する教師のカリキュラム構想、開発等の力量である。また、総合的な学習の時間は、教師がチームを組んで指導に当たることによって、生徒の多様な学習活動に対応することから、教職員全体の指導力向上を図る必要もある。したがって、すべての学校で年間の職員研修計画の中に、総合的な学習の時間のための校内研修を確実に位置付けることが極めて重要になる。

その際に留意したいのは、研修によってどのような指導力を身につけたいかについて目標を明確に設定することである。毎週の総合的な学習の時間を有意義なものにする目標をもった研修（授業担当者の指導力向上研修等）ならば週時程内に位置付けておくのが望ましいし、自校の総合的な学習の時間の実施状況を省察する等の目標をもった研修ならば学期単位程度の期間において位置付ける方が効果的であろう。また、研修の在り方について、合意を形成するためのコーディネーター（調整役）やファシリテーター（援助役）の役割を教師が体験できるワークショップ（参加体験）型研修を行うことなども学校全体の計画や実施状況の理解を深めると同時に、教職員の協同性を高めることにつながる。

校内研修のねらいや内容は、各学校の職員構成や実践上の課題に応じて適切に定めていくものであるが、まずは、『高等学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』を参考に総合的な学習の時間の趣旨や内容等についての理解を教職員全体で確かにする必要がある。

また、具体的な研修計画を決定する場合は、できる限り実践を進める教師の希望や必要感を生かした方法、内容等を選択する必要がある。

授業研究では、生徒が学習に取り組む姿を通して教師の指導について評価し、指導力の向上を図ることが必要である。また、総合的な学習の時間の授業を教師が互いに参観できるような工夫をすることにより、教師同士が学び合える学校文化が生まれたり、日常の授業を通じたOJTに発展していったりする可能性がある。

総合的な学習の時間の校内研修内容・方法

● 校内研修の内容例

- 総合的な学習の時間の目標、内容、育てようとする資質や能力及び態度の設定について
- 総合的な学習の時間の教育課程における位置付けや各教科・科目、特別活動及び道徳の全体計画との関連について
- 全体計画、年間指導計画、単元計画の作成及び評価について
- 教材開発の在り方や地域との連携について
- 総合的な学習の時間のためのICTの活用について
など

● 校内研修の方法例

《校内での研修例》

- グループ研修：指導計画作成や教材作りの演習、テーマに基づくワークショップなど
- 全体研修：視察報告会、講師を招いての講義など

《校外での研修例》

- 視察研修：他校で開催される公開研究会の参加、先進校の視察など
- 実地体験研修：生徒の体験活動の臨地研修とその評価など
- 教材収集研修：地域の諸事象の観察や調査など

「高等学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編」より

総合的な学習の時間を進める中で教師が育つ — OJT の中で高められる教師としての専門性 —

総合的な学習の時間の計画、実施、評価の中で高まる専門性

計画・準備段階で高められる専門性

- 指導計画を作成する力、授業（学習活動）を構想する力
- 学習指導要領及び学習指導要領解説についての理解
- 生徒、地域等について、分析する力、実態把握をする力
- 自校教師、他校教師や地域人材との交渉力、調整力 など

学習実施段階で高められる専門性

- 生徒の興味を引き出し、個に応じた指導をする力
- 話し合い活動など集団による学習を支援・統制する力
- 学習状況を的確に把握し、授業を進める力、評価する力
- 生徒の思いや願いを理解する力
- 他教師、外部人材と共同して指導する力 など

事後評価段階で高められる専門性

- 評価規準に照らして生徒の達成状況を評価できる力
- 指導計画等の課題を見出す力、活動の成果を見出せる力
- 指導計画、授業（学習活動）を改善する力 など

総合的な学習の時間を充実させるためには、指導計画を策定し、運用する力が必要となります。また、実践に伴って次々と生まれる諸課題を解決する力や地域人材等と調整する力も必要になります。

このことから、日常において総合的な学習の時間の改善努力を行うこと自体がOJTであり、教師としての専門性が磨かれます。ある自治体では、総合的な学習の時間のカリキュラムづくりを若手教師のセンター研修テーマとし、教師としての専門性の向上を図っています。

OJT [On The Job Training] とは

日常的な職務を通して、必要な知識、技能、意欲等を意図的、計画的、継続的に高めていく取組（人材育成）

事例 中・高が定期的に合同して行うワークショップ型研修の事例

《F 高校の概要》

- 生徒数 480 人、教職員数 36 人
- 学級規模 各学年 4 学級

《G 中学校の概要》

- 生徒数 290 人、教職員数 26 人
- 学級規模 各学年 3 学級

- 学校・学区の特色：連携型中高一貫教育校、政令指定都市、古くからの商業地（商店街）と周辺の住宅地からなる学区
- 総合的な学習の時間の主な内容：「地域を愛する心、地域貢献の心と態度をはぐくむ学習」

F 高校は、大都市の商業地域にある中規模校です。近年、設置者である自治体から近隣の G 中学校との連携型中高一貫教育校の指定を受けましたが、なかなか中学校・高等学校を共通の理念で貫いた教育課程編成が進まず、苦心していました。また、教職員間の交流等も停滞していました。

そのような中、F 高校の校長は、中高一貫教育の重点的な目的を「6 年間の連続性のある学力向上策の展開」に加え、「市民性の育成に向けた地域に関わる学習の推進」とすることを G 中学校の校長に提案しました。協議の結果、「市民性の育成」については、総合的な学習の時間を中心に、公民、国語、外国語（英語）、保健体育、家庭、情報等の教科・科目等と特別活動を関連させ進めることとなりました。

そして、両校の校長は、中学校と高等学校の教員間の交流の活性化を期待して、両校の研究主任、総合的な学習の時間コーディネーター、研究推進委員に、「総合的な学習の時間の単元作り」を内容とした中学校・高等学校の全教職員参加によるワークショップ型研修の実現に向けた調整等を行うように命じました。研修会の経過と研修の内容については以下のとおりです。

研修会の準備から実施までの経過と研修の内容

月日	会議	協議、検討内容・研修内容
4/20	第1回合同研修会（全体会）	<ul style="list-style-type: none"> ● F 高校を会場として実施する。 ● F 高校研究主任から「市民性の捉え方」、育てたい生徒像、推進組織、研修計画等を説明。 ● 総合的な学習の時間についての新学習指導要領の理解を行う。 ● 自己紹介後、ワークショップのグループづくりを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・10グループを編成する。（1グループ5人又は6人） ・全てのグループは、所属学年、校種、経験等の偏りがないように編成する。 ・各グループに必ずまとめ役となる研究推進委員が入る。
8/20	第2回合同研修会 「地域素材発掘ワークショップ」	<ul style="list-style-type: none"> ● G 中学校を会場として実施する。 ● ワークショップの進行は外部講師（大学教授）を招聘する。 ● グループごとにワークショップを行う。2つの教室を使用する。 ● 各グループは、地域マップを広げ、「市民性」をはぐくむための地域素材について話し合うとともに、その素材をどの学年の何の学習活動で活用できるか、具体的な単元計画を作成し、プレゼンテーションにまとめる。 ● 資料完成後、全グループが多目的室に集まり、報告を行う。 ● 研修会終了後、研究推進委員が集まり、当日のワークショップの振り返りと次回の内容について協議を行う。
11/8	第3回合同研修会 「授業研究ワークショップ①」	<ul style="list-style-type: none"> ● F 高校を会場として実施する。 ● 「地域の素材発掘ワークショップ」で発表された学習活動についての研究授業を実施する。 ● 研究授業終了後、各グループに分かれ、当日の研究授業の単元・学習活動をさらによくするための改善方法・内容について話合う。 ● 各グループでの話し合い終了後、各グループから報告を行う。 ● 研修会終了後、研究推進委員が集まり、当日のワークショップの振り返りと次回の内容について協議を行う。
2/8	第4回合同研修会 「授業研究ワークショップ②」	<ul style="list-style-type: none"> ● G 中学校を会場として実施する。 ● 「授業研究ワークショップ①」とほぼ同じ進め方で実施する。

第3節 授業時数の確保と弾力的な運用の実践事例

総合的な学習の時間では、社会的な問題意識に基づいてデータを収集し、収集したデータを使って社会について考える等の探究的な単元や、連続して数日間行う体験活動などが短期間に集中的に行われる場合がある。

このような学習活動を実施するためには、通常、1週あたり1時間の授業時数を隔週で2時間連続して実施する時間割に編成し直す場合もある。また、体験活動など、総合的な学習の時間を集中的に実施する期間を設けることなどもある。

各学校においては、目的に応じた単位時間や授業時数の弾力的な運用による総合的な学習の時間を教育計画の中に適切に配当する必要がある。

事例① 目的に応じた単位時間等の弾力化の例

H 高校・第1学年の総合的な学習の時間

《学習内容と配当授業時数》(2単位)

	主な学習内容	月	授業時数
1 学期	●海岸自然保護プロジェクト—海岸パンフ作り— (現場視察による課題発見→探究的な学習→海岸パンフ作成) ●海岸パンフを海岸で配布	4	30 時間
		5	
		6	
		7	
	●地域の生物と食生活に関する社会調査	8	
2 学期	●地域の生物と食生活に関する報告会	9	30 時間
		10	
		11	
		12	
水曜日	1:30 (校庭集合、学年全体で学校発) → 1:40 (海岸着、グループ別調査活動開始) → 調査活動 → 2:50 (調査終了、全体集合) → 3:00 (学校着、学年活動) → 3:10 (学年解散)		

《1 学期の水曜日5・6限目の授業》

- ・現地での調査等の活動は移動の時間以外に、最低、50分は欲しいです。
- ・水曜日に海岸で調べたことを自宅でまとめました。次時の総合的な学習の時間で仲間と意見交換して、新たな課題に気が付きました。



H 高校は、半農半漁の町にある全 9 学級の小規模校です。

美しい海岸が学校から徒歩で 10 分程の所にあることから、今年度の第 1 学年の総合的な学習の時間の前半の単元のテーマをこの海岸を学習のフィールドとした「環境教育」としています。

1 学期には、観光シーズンに訪れる人たちに、ゴミの持ち帰りなどの意識をもってもらうことを目的の 1 つとして、海岸の生物の多様性を調べ、「海岸生物多様性パンフレット (以下、海岸パンフ)」を作り、観光客に配布する学習活動を行いました。

海岸での調査活動や学校での探究的な学習の時間を確保するために、1 学期は隔週で 2 時間連続して実施する時間割に編成し直し、水曜日の 5 校時目に 6 校時目を加えて 100 分授業にしました。

さらに、長期休業期間中に総合的な学習の時間を集中的に実施する期間を設け、同じ海岸沿いにある I 市の工業地域の生物多様性の種類と分布を調査するとともに、自分たちの町の海外岸沿いの住民と I 市の外岸沿いの住民との双方に「どんな水産物をどの程度の頻度で食べているか」「その水産物はどこで購入しているか」等について調べ、地域の生物と食生活とのつながりを考えることにし、2 学期 9 月に中間報告会で発表しました。

事例② 1年間を見通した弾力的な授業時数の運用例

大都市、下町地域に位置する全24学級の大規模校のJ高校は、「地域のことを見つけ、地域の未来を考える」を全体テーマとした総合的な学習の時間「地域未来」（各学年1単位）を設定し、精力的に地域についての調査活動、地域貢献に関わる体験学習等を実施しています。

各学年の年間指導計画においては、地域行事等との関わりにより、地域での体験学習の実施時期、探究的な学習の実施時間等が大きく異なっています。

第1学年は、職場体験のために夏季休業中に15時間設定されています。第2学年は、10月に実施される地域の伝統ある祭祀についての研究と体験により、2学期の授業時間を多く設定しています。

そして、第3学年は、「地域創造計画」に取り組んでいます。高校生になると、地域との関わりは小・中学校の時よりも少なくなります。そのような中、本単元は、地域の未来を担う一市民としての自覚を深めることを大きなねらいとして、第1、2学年での探究的な学習等を通して把握した地域の課題をもとに論文作成と地域貢献学習を進めていきます。3年間の総合的な学習の時間を2学期までにまとめた論文「私の地域創造計画」として同級生・下級生への発表とするために、2学期に授業時間を多く設定しています。

第1学年		第2学年		第3学年		
全体テーマ「地域の課題を発見し、地域の未来を考える」						
主題	「地域の今を学ぶ一街の様子と人々の生活」		「地域再発見—伝統文化を中心に」		「地域創造—今、自分ができること」	
1学期	●学年ガイダンス	1	●学年ガイダンス	1	●学年ガイダンス	1
	●地域調査活動 ※地域人材とともに地域を調べる学習活動と課題設定	20	●地域の伝統行事（祭祀）についての調査活動	6	●論文「私の地域創造計画」執筆のための情報収集	14
夏休	●職場体験先の学習 ●職場体験 (6h×2日=12h) ●職場体験まとめ	(15)	個人研究		●論文テーマに基づく情報収集と論文個別指導	(9)
2学期	●職業についてのグループ別課題追究 ※探究的な学習と発表を、課題を同じにする生徒がグループで活動する ●3年生の論文発表会参加	14	●運営ボランティア参加 (5h×2日=10h) ●地域の伝統行事（祭祀）についての探究活動とまとめ、発表 ※保護者、地域の方を招いての報告会の実施 ●3年生の論文発表会参加	30 (20+10)	●「私の地域創造計画」論文作成に向けた情報収集と執筆 ●論文発表会準備 ●論文発表会	20
3学期			●東京の伝統文化についての探究活動と関西文化との違いの考察講座 ●日本の伝統文化研究	8		